

第24回新潟周産母子研究会学術講演会

日時 平成24年7月28日(土)
午後1時30分～6時
会場 新潟大学医学部 有壬記念館

I. 一般演題

1 先天性十二指腸閉鎖症術後に発生した吻合部潰瘍の2例

升井 大介・飯沼 泰史・平山 裕
飯田 久貴・内藤 真一・新田 幸壽

新潟市民病院小児外科

先天性十二指腸閉鎖症は新生児の消化管閉塞の原因として頻度が高いが、術後の予後は比較的良好であり合併症も多くはない。今回我々は十二指腸十二指腸吻合術後10～11年目に吻合部潰瘍となった2症例を経験した。2例ともDown症、偏食傾向の患児であった。本症の晩期合併症として吻合部潰瘍は報告が少なく、若干の文献的考察を加え報告する。

2 過去40年間における食道閉鎖症59例の臨床的検討

佐藤佳奈子・小林久美子・窪田 正幸
奥山 直樹・仲谷 健吾・荒井 勇樹
大山 俊之

新潟大学小児外科

過去40年間に当院にて経験した食道閉鎖症59例(男児33例, 女児26例)の経年的臨床像の変化につき検討した。平均出生体重は2,504g(808～3,590g)、在胎週数は37.9週(33.1～44.0週)で、病型別にはGross A型4例, Gross C型45例であった。出生体重, 在胎週数, 母親の年齢, 合併奇形, 出生前診断, 生存率を前半20年(I群)と後半20年(II群)の2群に分け比較検討する。

3 赤ちゃんの“おしりのケア”(経肛門的減圧チューブにて待機中のHirschsprung病症例の場合)

金田 聡・広田 雅行・地濃優貴子*
長岡赤十字病院小児外科
同 看護部(WOC認定看護師)*

症例は生後7日の女児。主訴は胎便排泄遅延, 腹満。注腸検査で下行結腸に口径差を認め, H病の診断。経肛門的に拡張部までチューブを挿入・留置して減圧し, 成長を待ち根治手術の方針。当初, 固定用絆創膏の刺激とチューブをつたわる腸液の刺激でおしりの皮膚炎が痛々しかったが, WOCの介入で皮膚炎のケア, 予防策をしてもらい改善した。当院では早い時期からWOCが積極的に関わってくれるので大変助かっている。

4 壊死性腸炎後の大腸狭窄に対して大腸切除術を行った超低出生体重児の1例

内山 昌則・村田 大樹・斎藤 朋子*
山中 崇之*・篠原 健*・須田 昌司*
県立中央病院小児外科
同 小児科*

症例は緊急帝王切開で出生726g, 呼吸循環管理。日齢28に嘔吐, 禁乳。29に血便・CRP上昇し壊死性腸炎として保存療法。34に母乳再開。37に嘔吐あり禁乳。浣腸で便排出みられ39にTF再開。嘔吐・禁乳・TF再開を繰返したが, 58に嘔吐・無呼吸あり59に挿管。腹満が著明となり画像で腸管拡張像が増強し腸狭窄・腸閉塞として64に開腹術。上行結腸狭窄あり盲腸上行結腸切除, 回腸-横行結腸吻合術。術後5日TF再開, 以後良好。経過・組織を報告する。

5 双子1児に発生したヒトパルボウイルスB19感染による胎児水腫の1例

井上 清香・工藤 梨沙・白石あかり
本多 啓輔・加勢 宏明・加藤 政美
長岡中央総合病院産婦人科

症例は30代。DD双胎。妊娠13週母体パルボ

ウイルス感染後、22週1児に胎児水腫を認めた。皮下浮腫は改善するも腹水は著明であった。23週には胎児水腫は消失した。37週母体適応にて緊急帝王切開術施行。両児とも異常所見なく、胎盤免疫染色パルボウイルス B19 (－) であった。パルボウイルス感染により DD 双胎の1児のみに胎児水腫をきたしたが、自然寛解する例も多く、侵襲的な検査や治療には注意が必要である。

6 妊娠末期に著明な血小板減少を示し血栓性血小板減少性紫斑病が疑われた1例

山口 雅幸・吉田 邦彦・上村 直美
山田 京子・芹川 武大・高桑 好一

新潟大学医歯学総合病院
総合周産期母子医療センター・
産婦人科

症例は20代、0妊0産。特に異常なく他院で妊娠管理されていたが、妊娠36週時に両下肢紫斑が出現、血小板数減少にて当院紹介。血液検査にて血小板数 $1.5 \text{ 万}/\mu\text{L}$ 、ADAMTS13 活性低下が判明、血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) が疑われた。新鮮凍結血漿投与開始後に血小板数増加を認め、妊娠37週で termination とし生児を得た。妊娠に合併する TTP は極めてまれであり文献的考察を含めて報告する。

7 周産期における虐待予防

鈴木 美奈・水野 泉・関根 正幸
安田 雅子・遠間 浩・安達 茂実

長岡赤十字病院産婦人科

児童虐待が増加の一途をたどっている。H22年度の全国児童虐待は前年より1万件以上増え5万5152件と報告されている。社会的な関心の高まりは認められるものの、予防を確実に行的には、我々、周産期従事者の意識改革が必要と考えた。長岡市の要保護児童対策地域協議会関係者よりいただいた資料を基に、虐待の現状、および我々の果たすべき役割について報告する。

8 常位胎盤早期剥離ならびに術後肺胞出血を発症した重症 SLE 合併妊娠

田村 正毅・山岸 葉子・常木郁之輔
棚瀬 徹・倉林 工・長谷川 尚*

新潟市民病院産婦人科
同 腎臓・リウマチ科*

SLE 診断後、コントロール不良のまま妊娠成立した症例を経験した。妊娠後、内服ステロイド量は増加し、妊娠31週に常位胎盤早期剥離を発症し、緊急帝王切開術で児は救命。しかし、術後母体の腹壁さらには手術創部とは関係ない後腹膜内出血を認めて再開腹を施行。さらに SLE が原因と考えられる肺胞出血を発症。計3回の救命センター管理ならびにステロイドパルス療法にて救命することが出来た SLE 合併妊娠を経験したのでここに報告する。

9 新生児化膿性股関節炎の1例

鈴木 亮*・竹内 一夫・小松原孝夫**
堀 智里・松井 俊晴・田中 篤
郡司 哲己

長岡中央総合病院小児科
県立新発田病院小児科*
県立六日町病院小児科**

Mycoplasma hominis は *Ureaplasma* と共に絨毛羊膜炎の分離菌や早産児の慢性肺疾患との関連で知られる。我々は *M. hominis* による皮下膿瘍、化膿性股関節炎を発症した新生児例を経験した。患児は子宮内感染が疑われたため出生時より抗菌剤を投与した。各種培養は陰性で、起炎菌不明のまま悪化し化膿性股関節炎へ進展した。関節液、臍帯の PCR で *M. hominis* が検出された。垂直感染により侵襲性感染症に至った稀な症例と考えられた。